

県小体研だより

鳥取県小学校体育研究会 令和5年6月発行

＜第3回実行委員会より＞

6月1日に5年度の新体制で開催しました。そもそもこの組織には、以下の4つの部があります。

- ・総務部―庶務、会計、渉外、文書作成
- ・企画運営部―会場設営、大会運営
- ・編集部―大会資料、記録作成
- ・研究部―基調提案、分科会、公開授業



米子市部員中心に境港市、西伯郡、日野郡部員など西部全体で協力して担当しています。

今回は一般参加者を約300人規模と想定しています。(前年の山口大会は約350人) 8月下旬に第2次案内が県内外に発送される予定です。

米子市会長・吉田校長先生の話

運営側として、会場の就将小の先生方が授業に集中できる環境にすることを一番大切に考えたい。授業以外のことに気がつかうことがないようにしたい。

次に、コンパクトで効率よい運営をめざしたい。昨今、多くの教員を集めて運営することが難しい。西部の部員さんの協力を得ながら、必要最小限で対応したい。**「やってよかった！来てよかった！見てよかった！」**という感想を、当事者や参加者の多くの人にもってもらえるような大会運営を心がけたい。

圧倒的な会場立地の良さ

今回の大会では、東・中・西部と3年間研究大会を連続して開催し、県全体で研究を継続した強みが一つあります。

そして、就将小学校会場を中心に、授業会場、分科会会場、全体会会場、駐車場等が半径約300m内に集中していることです。授業会場の一つ湊山中学校は、敷地が就将小学校と隣接しています。分科会、全体会会場の米子文化ホールや米子コンベンション及び駐車場は、徒歩10分圏内です。これは大きな強みです。運営するのに効率的且つコンパクトですし、参加者に分かりやすいことが何よりです。

分科会会場が就将小学校ではなく他施設になることは、会場校が授業に専念できる環境づくりにもつながるので

＜今後の主なスケジュール（予定）＞

- 6/10 中・四国小体連総会（高松）
（鳥取大会の周知・PR）
- 6/21 就将小全体研（日野先生来校）
- 8/1 県小体研夏季研修会
- 8/17 各種原稿締切り
- 8月下旬 第2次案内発送
- 9/1 大会参加者受付開始
（両面の文責 県小体研・顧問 長谷川）

領 域	会場校 担当都市	A 3つの目玉(・「する、みる、支える、知る」の多様な関わり方 ・授業に浸っている ・準教科書の活用) B 4つの共通実践(・ふり返り板 ・体育アンケート ・準教科書の活用 ・ICT) C 授業や分科会提案で中心となりそうな方向性や内容など
ゲ ー ム (低 ・中)	会場校 東 部	A まとに当てる楽しさを味わえるように、アナログゴンからシュートがたくさん当てられる経験をさせる。 B ふり返り板をもとに、みんながシュートを決められるような話合いができるようにさせる。 C 苦手な児童には色を変えたボールを使って守備が邪魔できないようにしているルールの工夫や、チームで何度も攻められるように守備の範囲を限定しているコートの工夫 A 準教科書の活用。ルール、運動の行い方、ふり返り等。準教科書を拡大コピーしたものに「コツ」を書き込んでいく。 B 5項目の診断的評価、形成的評価を活用して、子どもの意識を見取って授業改善につなげる。 C 場の設定や作戦の工夫を行うことで、苦手な子もキャッチバレーボールの楽しさに浸れる授業づくり
陸 上 運 動 ・ 高	会場校 日 野	A 体育館の中でも走り高跳びの記録がたくさん計測できるように小グループで取り組める場を設定し、グループで互いに教え合いながら記録を伸ばしていく。 B クロームブックで試技をしている場面を動画で撮影し、試技直後にグループで動画を視聴して、アドバイスをし合う。 C 自分の記録をもとに、伸びに合わせて得点を付け、チームの最高得点を目指す。 A 幅跳びで「リズムカル」「強い踏み切り」などの課題を解決するため、iPadを活用して「する・みる」を意識した関りを仕組む。 B iPadに録画したものを活用して、単元初めと終わりの動きの変容も見えていく。 C ICTを活用することで、自己の課題を認知し、他者と協力しながら課題解決を目指す授業
体 つ く り (多様 な)	会場校 境 港	A 「4つの力」を高めるために、運動の場を8種目設定することで、自分の課題に応じた運動を選択できるようにする。 B ふり返り板をもとに、チームの仲間の困っていることに寄り添った話合いができるようにする。 C 中間ふり返りの中でアドバイスの参考となる各種目ごとの「秘伝の書」を提示し、児童同士の教え合いが活発にできるようにする。 A 準教科書等を活用して、子どもが「あっ、そうなんだ。」とこれから行う運動の必要性を理解するオリエンテーションの工夫。 B 技能と情意の2軸ふり返り板を活用して、楽しさや動きの変容を観察して分析・評価に活かしたり、良かったことを広げたりする。 C オリエンテーションの工夫や振り返り板での分析から、主体的に学んでいく(授業に浸っていく)内容を発表したい。
体 つ く り (ほ ぐし)	会場校 中 部	※当日、この領域の授業なし A 児童の表情(夢中、喜び、笑顔など)、振り返りの内容(できた、楽しさ)を見取って、「浸っている授業」を評価する。 B 準教科書を拡大コピーして、児童に運動そのもの、行い方などを提示して活用してきた。 C 児童が運動に浸った状態と運動量の関係を2軸で評価。児童同士の関わり合いが「楽しさ」につながることを発表したい。